昌益医学論の位置と「四行論」について

丸山敏秋

明治以前の日本医学史において、江戸時代の中期に当たる十八世紀ほど新風吹き荒れ、躍動に富んだ時期はない。まことに〝独創の時代〟と呼ぶにふさわしく、かつてないオリジナリティーを備えた医説を掲げるすぐれた医家が輩出した。

従来の通史では、この時期を古方派の台頭期と位置づけることのみがクローズアップされていたが、後世派と古方派という二つの大きな枠組みだけで捉えきることは到底できない。たとえばすでに演者がとりあげてきた内藤希哲や三浦梅園のようなきわめて独創性に富む医家には、後世派とも古方派ともつかぬ面が多分に存していた。今回とりあげる安藤昌益も、そうした医家群の一人と言い得る。

元禄一六年（一七〇三）に秋田で生まれ、宝暦十二（一七六二）年に没した昌益は、その経歴や事蹟に不明なところの多い、謎に包まれた医家であり、稀有な思想家である。著書は刊本『自然真営道』三巻、稿本『統道真伝』五巻、稿本『自然真営道』百巻が知られる。大部の主著稿本『自然真営道』の大部分が焼失したために謎を一層深める結果となったが、近年になって『神医天真論』など弟子の医書を含む関係資料がいろいろと発見され、それらも包摂した全集が発刊されるまでになった。

安藤昌益は日本の生んだ独創的思想家として、しばしば三浦梅園と並び称される。二人とも医を業としていたが、医論における独創性では梅園の方が一歩譲らねばならないであろう。その医論は『統道真伝』人倫巻に見ることができ、焼失した主著『自然真営道』の内容も大部分が医書に近いものであった。失われた医論については、弟子が祖述した医書によっておおむね知ることができる。だが、昌益医学論の全貌はなはだ捉え難く、研究は今日ようやく緒についたところである。

昌益は東北の八戸で町医者を営みつつ、壮大な社会哲学を構築した。僻地の町医者とはいえ、医学に対する研究は

きわめて深く、彼の思想体系の根底には医学研究の成果が横たわっている。昌益が生きた時代はちょうど古方派の台頭期に当たるが、彼が学んだ医書は『内経』を原典とするオーソドックスな中国伝統医学書（いわゆる後世派のテキスト）であった。儒教や仏教を中心とする当時の学問を、昌益は痛烈に否定する。その視界から、聖人の遺教として権威ある『内経』を批判するところに彼の医論の立場があった。従って彼を後世派の医家とすることはできない。また、昌益のもとにも古方派の胎動は伝わっていたが、それを彼は「妄失」と退けている（具体的に誰の説を指すのかは明らかでない）。すなわち昌益は古方派に傾倒したわけでもなかった。それどころか、彼はかつてない独自な医論を密かに練りあげていたのである。

昌益医の論は、産科学を第一としたこと、一気論の病因観、薬物批判や経絡の軽視、独自の精神病理観など、さまざまな特質を備えている。ここではそのうちの特異な「四行論」についてとりあげてみたい。

『内経』系医学は陰陽五行論（運気論も含む）を立論の根拠とする。昌益は陰陽論に対して、「陰陽」の概念に上下・貴賤といった制度上の正当性を肯定する臭みがあると否定。陰陽に代わる「進退」なる独特な概念を提示して、「進」と「退」の互性を立てた。

五行についても従来の五行論とはやや趣を異にした見方をとる。五行配当は伝統的なそれをほぼ踏襲しているものの、朱子学で説くように五行は陰陽から分出したものではなく、陰陽と同様に一気（真）が変化運動した相の一つと捉えた（「五行は自り然る真感の進退にして無始無終に一真の営みなり」）。五行の相克説は否定し、相生説に対しては母子関係ではない「順生」「逆生」の五行生成説を立てている。

さらに興味深いことに、彼は晩年になるとそれまでの五行論を捨て、「四行論」を唱える。それは、五行のうちの土を他の四行とは別格に扱い、土は木火金水を「就革（統括）」すると見たものである。さらにその四行各々が進退する八気により生理・病理を論じようとした。昌益は陰陽を三分する「三陰三陽論」をはじめから否定していたが、ここにおいて五の数も姿を消し、二・四・八など偶数を説明原理とする医論が構築されてゆく。臓腑では土に当たる脾胃を特別視した「四臓・四腑」論を説き、脈を「八感気」

と呼び、十二経絡を廃して十系統とするなど、さまざまな特色ある主張を見ることができる。

昌益が「四行論」を唱えた背景には、直耕という「土」を基とする一種の農本主義から階級制度を批判する彼の社会哲学もあったに違いない。だが陰陽五行論そのものに「四行論」の生まれる素地が存していた。三と五の偶数と奇数概念を統合するために、五行の土は過去においても特別視されてきた。李東垣の『脾胃論』などはその典型的産物である。彼が東垣の影響を受けたか否かは明らかでないが、自身の「進退互性」論を徹底させたとき、「四行論」が生まれるのは当然であった。そしてそれを徹底させたところに、昌益医学論における理論的枠組みの特色を、はっきりと読み取ることができよう。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所、医史文献研究室）

荻生徂徠が芳村夭仙へ送った書簡について

荒木ひろし

I

『徂徠集』に荻生徂徠が京の医師・芳村恂益（夭仙また幼仙と号した）へあてた書簡「芳幼仙に復す」を載せている。夭仙は江戸初期の学医・名古屋玄医の門人で『二火弁妄』、『内経綱紀』、『医学正名』等の著者として知られる。

元禄末年頃『二火弁妄』（以下『弁妄』）を編著した夭仙は、これを男・玄恂に口授したのち、知友であった入江兼通（徂徠の門人、漢詩人で若水と号した）を介して、徂徠にその評訂を乞うた。この申し出に対して徂徠は正徳三年梅雨時、別幅を附して夭仙へ報書したのである。その書面に云う。

不佞（わたくし）も亦医人の子なりと雖も、幼に其の書（素問・霊枢・難経などの医書）を読み、壮に其の学を廃